
○議長（藤井 要君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前 9時40分）

○議長（藤井 要君） 一般質問の前に申し上げます。質疑、答弁は的確にわかり易く、要領良く行ってください。通告以外の質疑はできません。また、関連質疑は議長の許可を受け質疑を続けてください。

質疑は一括質疑と一問一答方式どちらかを述べてから質疑に入ってください。

それから、固有名詞等は発言に十分注意してください。

なお、本定例会において、町長に反問権を付与します。反問権を行使する場合は、反問の趣旨、内容を示し議長の許可を得てから行ってください。

最後に、傍聴者に申し上げます。議場内ではお静かにお願いいたします。

◎一般質問

○議長（藤井 要君） 日程第5、一般質問を行います。

質問の通告がありますので、順次発言を許します。

◇ 高 柳 孝 博 君

○議長（藤井 要君） 通告順位1番、高柳孝博君。

（7番 高柳孝博君 登壇）

○7番(高柳孝博君) 少子高齢化の進む、松崎町の現状から、何もしなければ消滅すると言われた町を、見通しの明るい町にしようというのが私の思う所であります。町長は満足度の高い町を目指して重点施策を明確にしています。その一つに、道の駅パーク構想があります。町長の言葉から、この施策は町の再興の一端であり、一つは現在の道の駅の経営改善であります。二つ目は交流人口の増大、三つ目が町民の所得を増大する機会の創出ということを行っているわけでございます。私は町づくりを進める上で、一つは定住交流人口を増やす、二つ目は仕事を増やす、三つ目が新技術を使って町づくりを進める。そういったことが必要と考えておりましたので、町の再興のために、町民、行政、議会が三位一体となって取り組む必要があると考えています。近代の町の復興は、最初に依田佐二平翁、依田勉三の頃

であったかと思えます。この頃、炭の生産、生糸の生産、それから学校を建てる。まさに、私は近代化が始まった頃ではないかと思えます。その次は昭和に入って、依田町長が美術館、重文岩科学校や古民家の再生を進めた時期と思われます。このときは、国民宿舎をどのように経営すれば利益が生まれるか、そういったことを考え、必死で考えてマナーから料理、サービス、宣伝に至るまで、徹底して改善を加え、優秀な人材を投入して日本一の稼働率の国民宿舎に生まれ変わらせ、利益が出た。その利益を源泉にして、補助金や助成金を活用し、次々と新規の事業を展開していった。こういった時期があったと思えます。そして今、町の再興のイメージを考える時に、過去に作られた資源や**、自然などの資産が当時と同等に活用されるということを想像します。最も大切なのは目標であります。目標をきっちり立てる。そして、それに向かって改善を進めていく、施策を進めていく、そういったことが必要であると思えます。そんなに再興というのは、達成は簡単ではありません。しかし、今、始めなければ、いつまで経っても何も起きず、町は消滅していく、そんな考えであります。

そこで、町の再興の一環としての施策、道の駅パーク構想について質問します。1つは、管理運営に係わる今後の取り組みについてであります。ワークショップが作られておりますが、ワークショップの目的をどのように考えるか、サウンディングの調査実施をどのように考えるか。もう1つは、管理運営方式選定の方針はどのようなものかでございます。

大きな項目の2つ目としまして、第5次総合計画後期基本計画の進め方についてであります。目標指数の目標値を実施計画へどのように展開していくか。観光の振興について、観光客数の増加の目標値が、前期も後期も40万人であるが、2016年実績で32万人と2011年の35万人より減少している。目標値達達成のためのP D C Aについて、年度ごとの目標値を決め、管理値を決めて対策する考えはないかです。

2つ目は、P D C Aを回すために、いつまでに、だれが、何を、どれだけ、いくら必要になるかを明確にして、総合計画の施策との関連を示す、体系図あると・・・必要ではないかと考えております。以上、あとは席について質問いたします。

(町長 長嶋精一君 登壇)

○町長(長嶋精一君) 高柳議員の冒頭の挨拶で、町政は町と町民、それから議員も一体になって、今、この大変な時期に進める必要があるという考え方に全く共鳴いたします。私も、議員時代がございました。全く、その考えで議員として活動してきたつもりであります。何

でも反対ってことではなくて、これについては一緒にやるよと、町と一緒にやるよという気持ちで、私は議員時代2年半やってまいりました。その考えは、攻守交代するという意味ではなくて、町を良くするためには、全くそういう考えではいけないというふうに思っています。ありがとうございます。

高柳議員の質問にお答えします。道の駅パーク構想、大きな1として、道の駅パーク構想について、管理運営に関する今後の取り組みについてということでございます。3つあるわけですが一括してお答えしたいと思います。その内の1つ、ワークショップの目的をどのように考えるか。2つ目、サウンディング調査実施をどのように考えるか。3つ目、管理運営方式選定の方針はどのようなものかということでございます。お答えします。道の駅・旧依田邸の整備活用につきましては、議会選出議員、地元関係者、産業関係者、まちづくり団体、金融機関などで構成する道の駅パーク構想基本計画策定委員会を設置し、協議検討を行い昨年3月に基本計画を策定いたしました。多くの皆さんが計画段階から参画し一緒に考え、さまざまな視点で深みのある議論が交わされ、道の駅を自分たちのこととしてより良くしようとする動きにつながったと考えています。基本計画書におけるワークショップやサウンディング調査については、一般的な事例を設けたものであり、現在、道の駅整備運営ワーキンググループにおいて意見を集約し、反映できるものはしてまいりたいと思います。また、道の駅及び旧依田邸の管理運営については、地方自治法第244条の2第4項及び松崎町の公の施設に係る指定管理者の指定の手続きに関する条例第5条の規定により、非公募で指定管理者を一般財団法人松崎町振興公社とすることで、松崎町行政調査委員会へ諮問し、8月2日付けで原案どおり答申がされました。

大きな2つ目の質問であります。松崎町第5次総合計画の進め方について、目標指数の目標値を実施計画へとどのように展開していくのかということでございまして、その内の1つ、観光の振興について、観光客数の増加目標値が前期も後期も40万人であるが、2016年業績で32万人と、2011年の35万人より減少している。目標達成のためのPDCAについて年度ごとの目標値を決め、管理値も定めて対策する考えはないかというご質問でございます。お答えします。松崎町第5次総合計画後期基本計画では、評価・検証を明確に記載し、それぞれの施策ごとに目標指標を設定し事業を展開しており、議員ご指摘の観光の振興については、2022年の観光交流客数を40万人の目標としているところでございます。平成30年度の観光客数は33万人で、3年連続して増加はしていますが、目標値に対しては83%となっております。

ます。観光客を増加させるための施策として、松崎町の地域資源を活かした体験型観光や伊豆半島ジオパーク、インバウンドの推進があり、現在進めている道の駅及び旧依田邸の整備につきましても、交流人口を増やしていくという目的がございます。年度ごとの管理値は定めていませんが、毎年度の実績を把握し、毎年3カ年の具体的事業を行う総合計画実施計画のローリングを行っており、現状を踏まえた上で見直しをしております。

次に、第5次総合計画の総合計画の2つ目のご質問でございます。PDCAを回すために、いつまでに、誰が、何を、どれだけ、いくら必要かなどわかる帳票と総合計画の施策の関連を示す体系図が必要ではないかというご質問でございます。総合計画の事業評価を行う上で、各課において事業の進捗状況、効果、課題を分析し、役場組織を横断する各課長出席の総合計画庁内会議において事業評価シートを基に評価検証を行っております。また、行政だけの評価ではなく、総合計画委員会においても協議を行い、今後の取り組みに反映できるものは反映しているところでございます。計画書では、総合計画の体系図を示しており、社会環境や町の課題を整理した上で、総合計画の事業評価については、基本的に新年度予算編成が始まる前までに行い、具体的な事業ごとに実施計画書を作成し、事業費等の検討を行い、効率的な事業執行に努めております。以上で高柳議員の質問にお答えいたしました。

○7番(高柳孝博君) 一問一答でお願いいたします。

○議長(藤井 要君) 許可します。

○7番(高柳孝博君) まず、道の駅パーク構想についてでございますが、ワークショップの目的をどのように考えるかでございます。ワークショップが色々聞いてくるところによりますと、直売所についてのこの話はよく聞こえてくるのでありますが、実は道の駅の機能からすると、直売所だけでなく、その他の休憩の施設であるとか、それから情報の関係、それから地元との連携の強化の関係、さらに深く詰めると防災の関係も入ってくるわけでございます。そのあたりの検討をどこでやっていくか、今のワークショップは、先ずはどんな品目を出していただけるか、農家の方とかいろいろな関係の方と進めているということでございますが、その他のことをどうするのか、やはり検討する必要があるかと思っております。そのあたりいかがでしょうか。

○企画観光課長(高橋良延君) 高柳議員のおっしゃるとおりですね、道の駅に求められる機能というのが、やはり、休憩、情報、地域振興機能というのが道の駅に求められる機能でございます。これを更に、今の現状より強くしていきたいということで、現在、道の駅パーク

構想も上がっているところでございます。

おっしゃるとおりその機能には、新たに防災機能も加えまして、直売所だけでなく道の駅全体で魅力を高めて交流人口を増やしていこうと、ワークショップでも道の駅全体の魅力化という中でも検討しているところでございます。

○町長（長嶋精一君） せっかく道の駅を作っているのに・・・直売所を作るわけでありまして、私としては直売所にとどまらず、直売所でもって農業の関係の講習と申しますか、農業生産者に集まっていただいて、新しい農業を・・・、あるいは農産物はこんな物があるよというような講習会を開いたり、あるいは農業生産するには、今、鹿猪が出て困っているというような話も当然出てくるわけですので、その鳥獣被害をどうやって食い止めていくのかということも議論できる場所にしたいなと・・・、そして、もう一つは例えば、生産物が集まるわけですから、料理の新しい・・・地場の料理をどうやって開発していくかということも検討していきたいなとこのように思っております。従って、単なる直売所ではなくて、そこへ行くと色々な形で勉強できるぞと、ご老人もいっぱい出していただいてね、そこでもって新しい物を作って、そこで販売して、所得を得る。そしてまた新しい物を・・・、畑でもって新しい物を作ると、そういったことで耕作放棄地も減らしてまいりたいと、このように総合的に考えております。

○7番（高柳孝博君） 確認でございますが、今、ワーキンググループは現存している訳ですけど、その中では、今の広範囲のそれぞれのジャンルについて、それぞれ検討されていると、そのように考えてよろしいでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 道の駅全体として、検討しております。全体の魅力を高めると言うことで検討しております。

○7番（高柳孝博君） まず、ワーキンググループでもいろいろな検討はされていると思うんですが、道の駅で交流の人口を増やすというからには、ここに来なければならないような物、あるいは、ここに来るとあるけれど、他にはなかなか見つからない差別化できる物、そういった物が必要ではないかと思うわけです。以前、日本で最も美しい村連合に加盟するときに、そのときに最初に講演があった中には、日本一を作れという話があったわけです。日本一というのは、おそらく、ここに来て、どこにもなくて、ここに来なければならないという物を作れということだと思います。そのあたり、今の中でも、やはり考えていく必要があるのではないかと思います。そこは、いかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） やはり、道の駅、そこに行く目的というものを作らなければならぬというのは一つ大きくあると思います。その中では、松崎町には日本一が有ります。桜葉という、やはり他にはない、大きなアドバンテージがある物があります。やはり、そこの桜葉というところも・・・、そこの道の駅に行けばそこで、桜葉の商品とか含めて、加工品とか含めて、そこに行けば一手にあるぞというような形で、やはり桜葉に特化した、そういった道の駅のコーナーも考えられるんじゃないかということも意見として上げられております。また、もう一つは、姉妹都市で帯広市がございます。松崎に・・・やはり、帯広市の産品は・・・やはり、ここが松崎町と大いに関わりがありますので、ここは、やはり帯広の産品を、この伊豆の松崎で扱うということの意義が大いにあるのかなという、それは差別化につながるものであるなということ考えています。

○町長（長嶋精一君） 今、課長から話がありましたが、桜葉それから棚田、なまこ壁これは日本一だと思っております。それと、これを更にイメージアップするために、道の駅を作っていきたいなと思っております。そういう中で、道の駅で今、新商品と申しますか、特殊な商品というのは地場産品を作っていきたいんですけど、それでなくても帯広の生産物を出していきたい、あるいは、防災協定で結んでいる長泉町、ここも農産物がたくさんあるところとございます。そこの物産を出していきたい。あるいは安曇地区、ここも協定を結んでおります。安曇地区の製品も出していきたい。それは、日本で一番美しい村との協定もたくさんございます。それらもですね、各シーズンごとに特徴を出してですね、松崎でしか食べられないようなものをですね、提供していきたいというふうに考えています。

○7番（高柳孝博君） 今、多方面の商品を考えているということでしたが、松崎町も桜葉はかなり有名なわけですけど、過去に見てみますと色々な産品というのがあったように思います。現在作られていない物であっても、例えば、イグザであるとか・・・作っていましたよね。それから、炭も松崎の結構重要な産品であったように思えます。あと、実際に今はもうないわけですけど、絹を作った富岡製糸に次いで、早い時期から製糸工場を作ったという経歴もあるわけですので、そのあたりをまた、現在はなくても掘り起こして商品化するのであれば、松崎との関連があるかのように思えます。

それから、現在、商品を作ろうかとするときに、既に生産者がかなり減ってきているということを考えて見ますと、現在だけの物ではなかなか難しいのかなと。桜葉をやると・・・今まで桜葉を数年間やってきた中で、桜葉を求めて何人かの方、来ていらっしやると思います

けれど、そのあたりのマーケティング調査とか、そういったことは行われているのかどうかですけれど、今までの商品だけでなく、将来的に考えますと、私はやはり新技術をそこで体験できるというようなことも必要ではないかと・・・、イベントも当然、メニューの中で考えられると思いますので、その中でいろんな体験ができる・・・先ほど、事業報告の中で自動車の自動運転とありました。自動運転って、私も実際体験してみたいなと思っているわけですが、例えば、そういったことの体験、例えばドローンを使って遊べるとか、あとはAIのね、体験っていうのはなかなかできて・・・、今はAIも簡単に無料で使えますので、そのあたりの体験をさせるとか、いろんな体験的なものもできると思います。燃料電池車とかありますよね・・・、いろいろと・・・、それから小学校については教育長もいらっしゃいますけれど。

○議長（藤井 要君） 高柳議員、あまり外れずに・・・道の駅のパーク構想の関係で・・・。

○7番（高柳孝博君） じゃあ、道の駅の関係で、今、私が言っているのはメニューの話ですので、道の駅のメニューをその将来的な物をどのように考えられていますか。いかがでしょうか。

○統括課長（高木和彦君） 高柳議員のお話の中で、今まであった古い物を活かしたらどうかということ、それもアイデアの一つかと思います。ただ、令和3年4月オープンに向けての中です、今すぐにそれができるというわけではないものですから、それは時間をかけて検討したいと・・・。ただ、松崎町の中にはたくさんのお菓子屋さんがあります。立地条件の関係で観光客の方が来るような環境じゃないお菓子屋さんなんかもありますので、それを道の駅なんかで出品していただく、そういった形でですね、お店の品揃えを揃えるというのが一つかと思います。

それと、もう一つは、道の駅だけ整備すればいいというわけではなくて、やはり町としては、例えば清水からの土肥のカーフェリーについてのいろいろな応援、縦貫道の整備、あと、下田松崎線の整備、国道136号線の整備ですとか、特に下田の方で、縦貫道が来る関係がありますと、下田松崎線の整備というのは非常に重要だと思いますので、そちらについては町長も陳情等に行ってますね、なるべく早いうちに完全に素晴らしい道になるように努力しておりますので、そういうことも含めて今後、検討していきたいと思います。

○7番（高柳孝博君） 先ほど、ちょっと言いかけたんですけど、小学校のプログラミングっていうのが始まってくると思うんですが、そのあたりも、例えば、後継者育成という意味で、

道の駅がそういった役割も・・後継者を作るということも必要だと思いますし、もちろん農業生産者の育成っていうのも必要でしょうし、あるいは、道の駅を運営する・・運営者の経営する側の運営者の育成っていうのも必要だと思いますけれど、子供に対してもそういった育成っていうのも考えていく必要があるかと思います。そのあたりいかがでしょうか。

○教育長（佐藤みつほ君） 教育構想につきましては、色々と道の駅との関連も考えながら、先ほどお話がありましたように、三聖塾等も色々計画しております、やはり、私たちの歴史の古い町ならではの町、それから色々な名士等、たくさん出ておりますので、そういうことも考えながら、今、先駆けとしてある、教育機器の関係と結びつけながら、色々やっているとございませう。

○町長（長嶋精一君） あれもやる、これもやるということですね、結局できなかったということになっちゃいますから、僕は総花的なことは嫌いなもので、ただ、農業に関する限りにおいては、道の駅、直売所でトータルとして、さっき言ったようにやって行きたいなと思っております。その中に当然桜葉も入っております。桜葉も貴重な財産でございますので、その桜葉をじゃあ、5月から10月までの摘み取る期間の・・例えば、小学生じゃなくてですね、中学生、あるいは松高生に夏休み等に手伝っていただいて、特に松崎高校生にはボランティアとして点数を・・、点数が上がると、そうすると大学に入っても、あるいは就職しても有利になるということがあろうございませう。だから、そういうことも含めてですね、それじゃあ、動機が不純じゃないかと・・そういうことじゃなくて、やはりその、そういうことはボランティアというのは非常に大事でございますので、それにかからめて、直売所、桜葉、それから学校の生徒ということを結びつけてやってまいりたいと、総合的にやってまいりたいなというふうにご考えています。

○7番（高柳孝博君） いろんなメニューが考えられると・・、まあ、あれもこれもというのは確かに、総花的にやると弱くなるので、重点的にやるっていうのは良いと思っておりますけれど、ただ、その他のことも、やはり情報、それから地域との連携、そういったものもやはり考えていかなければいけない。良い道の駅というのは色々なことを考えておまして、情報なんかパネル一つとってもどうするかとか、小さな町であっても映像そのもの、既に4Kの映像を流して世の中に知らせているという、それもあのいろいろな場面を編集しましてやっているということもありますので、情報それから休憩・・当然、道の駅ですので休憩をどうするかを考えていかなければいけない。そのあたりの所を最初にそれは、いきなり無理として

も、今後当然関わってくる、良い道の駅にするため、高度な道の駅にするためにはどうしても考えていかなければいけない。そのあたりの体制作りっていうのは考えていかなければいけないと思うのですがいかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） まさにおっしゃるとおりですね、道の駅の機能のやはり原則です。休憩、情報、地域連携振興機能。これを今の現状より更に強くしていくことが、この道の駅パーク構想の一つの方向性であったものですから、それについては役場の内部だけでなく、ワーキンググループでやっていますけれど、そういった目的でやって行きたいなと思っています。

○7番(高柳孝博君) それをやっていくというのは一過性のもではなくて、未来永劫、道の駅がある以上は続けなければならないことだと思うわけですけどね。それについてはやはり、それを検討することが必要、これから管理者が作られて、管理者がそういう機能を十分に持っていれば問題はないわけですけど、3人よりはなんとかと言いますから、知恵は多いほどアイデアも出ると思います。そのあたりは継続していく必要があると思います。そういう意味で次のサウンディング市場調査の関係ですけど、これは今回、指定管理者ということですので、業者を募って民間の企業のノウハウを利用するってことはなかなかできないかと思えますけれど、ただ民間の持っているノウハウ・・・これをやはり担保しなければいけない、そういうふうに思えます。そのためには、そういった検討を、今言ったメニューを含めて、そういった組織を作ってですね、継続して今の情報であるとか、休憩であるとか、地域連携であるとか、あるいは防災も入ってきますけれど、それぞれのことについて継続して、更に良くしなくちゃいけない。今年はここまでやって行こう・・・、最初はできないと思えますけれど、今年はどこまでやって行こうと、どこまで検討していこうかと、検討が必要ではないかと思えます。そのためには、やはり組織を作って・・・できれば外部の人の知恵でも借りる。そういったことも必要ではないかと思えます。そのあたりいかがでしょうか。

○統括課長（高木和彦君） 高柳議員の質問の中にサウンディング型調査というのがありまして、私も勉強させていただきました。やはり提案されたとおり、非常に良いシステムだと思っています。

ただ道の駅につきましては、平成29年から始めたということがあって、骨格が決まっているわけです。そのときの作った委員さん達の熱い気持ちの入っている計画ですので、そこは

基本的には、一つはしますけれど、ただワーキンググループの話し合いの中にですね、良い所・・例えばアイデアの収集ですとか、いろいろなことがメニューにありました。そういうのはワーキンググループの中に取り入れていってやれば良いと思います。また、これからですね松崎町、いろいろな事業がでてくると思うんですけど、そのときは、是非ですね、サウンディング市場調査なんかを取り入れたら良いものになるんじゃないかなと感じております。

○7番(高柳孝博君) あの、ワーキンググループは、多分この事業が始まるまでで、それ以降は解散すると思いますね。問題はその後の体制を、やはりワーキンググループと同様に住民と一体でやるためには、常に意見を取り入れてやるような組織、なんとか委員会でも結構ですけれど、あるいは外部の知識を入れる、そういったことが必要ではないかと思うわけですが、これは予算化しないとできていかないでしょうから、そのあたりはいかがでしょうか。

○企画観光課長(高橋良延君) 今、ワーキンググループで協議していますけれど、当然事業が始まりますと、そこはワーキンググループという形ではなくなるわけですが、やはり管理者の、例えば直売所を運営して行くにあたって、その下に住民の係わりというのが非常に重要だと思っています。そういったところで出荷者の協議会ですとか、道の駅の協議会になるのかわかりませんが、やはり住民を巻き込んで、その所は運営も一つにしていくというのが一つの手法かなということを感じております。

○町長(長嶋精一君) 高柳議員から貴重なご意見をいただいて、是非これからオープンした後でもですね、議員の方々・・特に高柳議員にもいろんなアドバイスをいただきたいなどこのように思います。正直に思います。

そして、私どもは振興公社でという案を持っているわけですが、もう、かなり前から、何でも民間企業に委託すればそこはハッピーになるという時代ではなくなっています。他所の市町、近隣の市町を見てもですね、例えば河津バガテルでも、委託する会社を募ってもですね、なかなか応札しないとか入ってこないというのが現状であります。従ってですね、私は、せつかく依田元町長が作られた振興公社の組織をですね、もう一度、立て直してね、今まで皆さん方が言っている振興公社の欠点というものを長所に変えるということを今考えています。私は、考えたら必ず実行いたします。そして成果が出るようにいたします。その辺を是非、ご理解とかウォッチしていただいてね、これからもそういう面でご指導

をお願いしたいなとこのように思います。

- 7番(高柳孝博君) 今後も、最初は立ち上げですので重点的にやるとして、その後も発展を色々考えておられるということですので期待しております。

次に、指定管理者制度についてですけれど、道の駅の機能イメージとして、地域外からの活力を呼ぶ・・・ゲートウェイ型というらしいですけれど、これはインバウンドの観光総合窓口、それから地方在住促進、こういったのを考えるのがメインでやるのがゲートウェイ型と言うらしいのですが、もう1つは地域の元気を作る、地域センター型というのがあるんですけど、産業振興、地域福祉、防災をメインにやるという2つの型があるようなんですけど、指定管理者に勧める方針としては、どのようなことを考えていられるでしょうか。

- 企画観光課長(高橋良延君) 今、2つの型ということをおっしゃいましたが、ゲートウェイ型と地域センター型という2つの型があります。ただ、それが、必ず別というのではなく、それぞれ相互に補完し合っているということも一方でいえますので、これは全くどっちかということには当てはまらないというようなことをございます。その上で指定管理者に求める方針ということをございましたけれど、先ほど言いましたように、やはり、道の駅に求められる休憩機能、情報機能、地域振興機能、これをやっぱり充実させて道の駅を一体として管理・運営していただく、その上で道の駅に賑わいを作り出して、それが町の活性化に繋げていくという形で、それを求めたいなということだと思います。

- 7番(高柳孝博君) いろんな幅が広いですので、それぞれのジャンルについて、力点をどこに置くかですよね。先ほど町長も言った全部をやろうとしてもパワーがないわけですから、どこに力点を置くかっていう、最初の目標から見ると交流人口を増やす、それから経営を改善していく、そこがまず最初に入ってくるのかなと思いますけれど、そのあたりを指定管理者の方にどういうふうに進めていくか、まあ町長がトップだから、自分で考えていけば良いのかもしれないですけど、そのあたりをどのように考えるのか。

それから指定管理者におけるモニタリングをですね、モニタリングっていうのがあって、今どんな業務が出てきているかってのもあると思うんですが、振興公社が身内みたいなものだからいろんな面で情報が入ってくるのかもしれないですけど、そのあたりどのように考えられるでしょうか。

- 町長(長嶋精一君) お答えになるか分かりませんが、振興公社は身内のようなものですから確かに、そこが非常にお互いの甘えに繋がっているものですからね、これからは身内

とは思わず厳しく、良いところは褒めるというように私のやり方をやって行きたいと思っています。

それで直売所は原点を言いますとね、観光客がですね、もう長八美術館も岩科学校も毎回毎回、行っていると、もう何回も行ったと、素晴らしいところだということでは分かったんだけど、あと足りないのは松崎町の地場産品であると、あるいは魚介類であると、そういう所を提供してくれるところが欲しいというようなニーズが実際問題あるわけですね、そのニーズに応えたいというのが一つあります。

そして本計画が、無謀であるかどうかは、高柳議員さんはおっしゃっていませんけれど、この計画が借入金が多すぎるかどうかというのが原点なんですよね、無謀かどうか。そして、これはですね、ほとんど国県でもって資金を・・補助金をもらってやるわけでありまして。それは、過疎債を使うじゃないかと言います。過疎債は30パーセント・・30パーセント払わなければならないじゃないかと言いますが、過疎債が30パーセント・・しかも15年間で返済すれば良いという、ほとんどですね、まったく資金繰りには関係・・、ほとんど関係しないじゃなくて、ほとんど困ることのない、そういうふうな資金計画になっております。

そして、何よりも道の駅で一番大切なものはですね、いかに・・一番最初に話をしました、魅力ある商品を揃えることができるか、ここなんですよね。魅力ある商品を集めることができる・・それは、先ほど言いましたように松崎町の地場産品プラス姉妹都市、そういう所の商品も提供していただいて、春夏秋冬、季節ごとのイベントを華やかに打って行きたいなど、このように思います。答えになっているかどうか分かりませんが、そういうことでございます。

○7番(高柳孝博君) 今、町長の方から、春夏秋冬・・ようはどんどん変化していくと当然観光も変化した中でやっていかなければ、増やすということはなかなか難しいというふうに思うわけです。そういった中で、当然、商品の開発とかマーケティングを今やって行かなければならない。それは今の振興公社の中でやっていくということなんでしょうか、それとも別途に、もっとそれだけの組織というのも考えておられるか、いかがでしょうか。

○企画観光課長(高橋良延君) やはり、直売所で売っていくという販売戦略の一つとしての商品開発というのは重要であるということで考えています。直売所については、やはりここが生産・加工・販売という一つ6次産業化とよく言えますけれど、ここのやはり入り口であ

と思います、直売所というのは・・・。ですから、直売所を活用しての商品開発というのはやはり、このところは考えていかなければならないのかなと、それは管理者が・・・運営者がやるのか、あるいは住民の方々とか。そういった方々がやるのか、それは明確には言えませんが、やはりそういったことが重要かなと思います。

○町長（長嶋精一君） 私はその・・・、商品開発ということについて、高柳議員が詳しいですから、イノベーションという言葉があります。これは技術革新というふうに訳されていますね。シュンペーターという人が唱えた経済理論であります。これはですね、あたかも製造業の分野で技術革新というふうに言われておりますが、シュンペーターが唱えたイノベーションという本当の意味はね、古いものを活かして、新しいものを加えると、これがイノベーションであるというふうに言っているんですね。ということは、我々は松崎町でできる素材を活かして、新しいものを加えていく、言いたいことはイノベーションをやって行きたいとこのように思っています。

○議長（藤井 要君） 高柳君あと7分ですから、時間調整を・・・。

○7番（高柳孝博君） 5分延長をお願いします。

○議長（藤井 要君） はい、5分延長します。

○7番（高柳孝博君） 今の話で行きますと、当然農産物についてもマーケティングというのは欠かせないわけですので、是非そこは進めていただきたいと思うわけですが、もう一つはイベントを仕掛けているところが道の駅ではあるわけですが、そのイベントなんかは本当に商品開発っていうかなんか分からないですが、企画ってことは非常に大事で、人を集めるということについては効果があると思います。物を買いに来るというだけではなく、イベントに集まってくる、実際に三聖祭りなんかでも地元の人もたくさんいるんでしょうけれど、集まって来ていると思いますので、そういったイベントを仕掛けていくということも必要かと思えます。そのあたりの考え方はいかがでしょうか。

○統括課長（高木和彦君） 高柳議員のおっしゃるとおり、そういうことも考えています。今、開設に向けてやっていることが先行しているわけですが、旧依田邸そちらなんかも良い素材はありますので、そういうのもからめながら、やってまいりたいと思います。先ほど町長の話の中で春夏秋冬という話が出ましたけれど、そんなリズムでやっていければいいんじゃないかなと考えています。

○7番（高柳孝博君） やっていく中で、先ほども、生産者の育成ってこともありますし、そう

いったものも実際に道の駅でやっているところがあるんですよね。商品を守る以上はそれを良くしていこうとすると、どうしても生産者の方にも後継者が減っていくと・・・、人口が減っていく中で減っていくということ、やはり考えて見ても、後継者を作っていくということは非常に大事ではないかと、そのあたりを道の駅の中で1つの機能として考えられているかどうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 高柳議員のおっしゃるとおりで、直売所でやはり産品を我々が集めなきゃなんないです。魅力ある品をいかに集めるかということであるわけです。そのためには、やはり生産者の育成ということは当然重要であるわけでございます。物を集めると同時に生産者の育成というのは重要であるということ。これは、町全体のある意味、農業振興や産業振興に係わることでございますけれども、農業分野で言うならば道の駅で、例えば、そういった講習会ですとか農業者の支援、あるいは町長が言いました食に関わる、そういったものまでも波及させて、道の駅で何かそういった会ができるのか、イベントも含めてですね、そういったことが考えられると思います。

そして、町全体の農業振興でいうならば有害鳥獣対策、やはりここは喫緊の課題、これで農業の意欲が低下するということもありますので、これも町全体の農業振興で、やっぱりやっていくということを諸々やって行くことが大事だなということ考えています。

○7番(高柳孝博君) 時間もあれですから、次に進みたいと思いますけれども、総合計画といっていますけれども、総合計画だけではなくて、全て物事を進めるに当たっては、最終の目的、ゴールがあって、そのゴールをやるためのプロセス、課程・・・途中の課程、そして課程に対する目標KPIというのがそこにもあると思うのですが、そのあたりをもう少し明確にしておいて、今回の場合、もし道の駅を考えるならば、ゴールというのは最初の交流の人口を増やすということと、それから道の駅の経営改善をするということ。そういったことが1つのゴールになっている訳ですね。そのゴールに向けて道の駅そのものもそれぞれの施策をやっていくと、そして最後は、一番本当のゴールというのは町の再興ということなんですよ、町を更に興してていくということ、そうしてみますと道の駅だけではなくて、道の駅は本当の入り口に過ぎないというように考えるんです。それをどう展開してくか、町の中に展開して行って、初めて町の再興になっていくような気がしますので、そのあたりの考え方はいかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） やはりですね道の駅、そこにとどまらず、全体の波及、町全

体としてどう波及していくかということは非常に重要だと思います。やはり三聖苑の道の駅のパーク構想の中では、交流人口の拡大が当然挙げられています。その中で観光交流客数を伸ばそうということで1つ、それから直売所での売上げについては、当然住民所得の増加に繋がるものですありますので、そのまま手数料分を差し引いたものが所得になりますので、そういったことは道の駅のところで得られるところでございます。

そして、全体の中では、やはり交流人口を増やすということが、やはり町全体の活性化に繋がるものであるのかなということで考えています。要するに、ここで道の駅で賑わいを作り出して、そしてそこで所得を得て、それをまた地域で消費してもらうという形でうまく町の中で経済の循環が図られれば、町全体にとっては非常に良いことかなと、町民にとってもそれはメリットであるのかなということで思っています。

○町長（長嶋精一君） 高柳議員がおっしゃったように、今、道の駅は13年連続赤字であります。昨年が1千万くらいの赤字であります。この赤字ってことはどういうことかといいますと、どっからか補填しなきゃまずいわけですよ。まちがいなく一般会計の方から補填をしている訳です。だから、これを食い止めなければいけないと、出血を食い止めるんだということが、元々のスタートであるわけですよ。

だから、ここを食い止めるためには新たに直売所を作るという計画であるものですから、まだまだ、直売所を作る時期じゃないとかね、まだまだ、まだまだといっているうちに、毎年、毎年、赤字が累積していったら、じゃあ住民はどう思いますかということのを僕は聞いたわけですね。従って、これはできるだけ早く、私はやって行きたいと思えます。

野菜とか、あるいは魚とかと同じように、旬という言葉があります。もう、旬を逃してしまったら、もうダメだと思うんですね。だから、そういう意味で私は、この赤字を食い止める、そして広報まつぎの「町長室よりこんにちは」で道の駅について、その1、その2で書いてあります。ちょっと、力んだような形で書いてありますけれど、私の本心であります。最終的な食の砦になるというような気持ちでやっておりますのでね、そこから文化も発信できるような、さっき言った農業の全体もそこから発信できるような、そこへ行けばかなりの問題解決になるよというようなことを考えております。私は、それを考えるだけでも絶対成功すると、もう目の前が、もうパラダイスになってくるんですね。この町は絶対良くなると、だから是非、これを賛同していただいて、早急にできるようにしていただきたいというのが僕の本心でございます。よろしく申し上げます。

○7番(高柳孝博君) まさに、いつやるの、いまでしょっていうとこだと思います。それで、総合計画の中では総花で色々出てきます。この一般質問の前に行政報告があったわけですが、公営企業全てについて、既にだんだん入館者も減っていく。収益も減り減少傾向にある。そういう意味では、再興という意味では、それらをなんとか右肩上がりしていきたい、そこが必要じゃないかと思います。そういう意味では、公営企業の・・・これはちょっと外れちゃうとあれですが、道の駅から派生して、そういったものの波及っていうんですかね、そこまで行かないと本当の町の再興っていけないんじゃないかと思いますので、そのあたりを図れるかどうかかわかんないですが、なんとかしてその影響が見えるような格好にして管理していただくとわかりやすいのかなと思います。非常に難しいと思いますけれどね・・・。

そして、人口を増やすなんて、7000人を止めるなんて、まず、絶対・・・絶対なんて言って怒られてしまうかもしれないですけど、不可能だと思いますね。だから、ちょっと努力したらできるところを指標として努力すると、それに対してできた・・・しかも具体的に、そのものが図れることによって、そして効果がちゃんと分かるようにして、なお且つ、誰が責任でやるのか、責任者を押しつけるのではなくて、皆で考えるんですけど、管理がされていない状態ではなくて、しっかり管理していく、そういったとこで進めていただけたら良いのかなと、そのあたりいかがでしょうか。

○町長(長嶋精一君) まず、振興公社が全て赤字状態で、これを全部含めて管理しなければいけないというような、高柳議員のおっしゃることですけど、そのとおりであります。

だから、僕は、すぐには全てを黒字体質にもっていくというのは難しいと思います。しかしながら、この直売所を中心に、必ずや全体の振興公社のやっている施設については、赤字ではない、黒字転換を必ずするようにもっていきたいとこのように思います。

その中で今考えているのは、人事関係をですね、非常にその・・・重きを置いて考えております。従ってこれは、私は手が届かないところじゃなくて、手が届くところにありますので、これは必ず、町民の皆さんに迷惑がかからないようにやって行きたいなど。しかも今度は、振興公社の従業員の態度が、非常に変わってきたよと、目の色が輝いてきたよと、しっかり挨拶もするよというようなことに結びつけていきたいなと思います。いずれにしろ道の駅をスタートにして、それから松崎町の再生を図って行きたいとこのように思います。そして、最後には、町民満足度の高い町にしてみたいです。よろしくお願いします。

○議長（藤井 要君） 時間がありませんので、これで質問を終わりたいと思います。高柳君
まとめて下さい。

○7番（高柳孝博君） 町長の方から、しっかりやって行きたいというような言葉をいただきましたので、未来に向けて明るい町が見える、そんな町になることを期待して私の質問を終わります。

○議長（藤井 要君） 以上で、高柳孝博君の一般質問を終わります。

暫時休憩いたします。

（午前10時37分）
